

やがて終わりの日、勝利の時が来る。主イエスがお与え下さるまことのいやしと平安が、主イエスを信じる者たちを包み込む日が来ます。

当時、ユダヤ人は《安息日(あんそくにち)》を大切に、律法を守って生きていました。この日、ひたすら真の神だけを讃美して生きてきた良い。そう教えられた律法に従ってきました。ところが主イエスの時代、律法を必死で守ることを大切にあまり、神との関係よりも他人との比較にばかり目を向けるようになっていました。律法学者やパリサイ人たちは、律法を誠実に守る自分のことを誇りに思い、他の人を裁いていました。

主イエスはこれまでも繰り返し、神が人をいやし、解放し、本当の安息を与えるお方だと語り続けてきました。そしてこの日も、安息日の集会所で、片手がなえた人に出会い、いやしをお与えになりました。《手がなえる》というのは木が枯れるという意味の言葉です。もう一方の手と同じように、生き生きと躍動して動く手で、本当に必要なものをしっかりと握りしめるはずの手が枯れてしまっていました。自分の為だけでなく、人を助け、人に仕えるはずの手が枯れて、自由に動かないのです。

神に喜ばれ、隣りに仕えて生きたいと願いながら、私たちは失敗を繰り返します。『わたしは何をしたら救われるのか』。多くの人がそう問いかけます。いったいこのわたしになお足りないものは何か、と尋ねるのです。ユダヤ人が、安息日に何をしたら良いか、何をしなかったら良いかと尋ねる時に、主イエスは全く違う視点からお答えになったのです。

「あなたがたのうち、一匹の羊を持っている人があるとして、もしそれが安息日に穴に落ちこんだなら、手をかけて引き上げてやらないだろうか。」(11節)聖書には、詩篇23篇の「主はわたしの牧者」という聖句のように、神が羊飼いとて、どれほど深く羊を愛して下さっているかが繰り返し記されています。私たちが穴に落ちて、何もすることができない時、神は手をかけて引き上げて下さるお方です。私たちが何かをするのではなくて、まず、神が、私たちが愛して、救い出して下さるのです。

それから主イエスは、「手を伸ばしなさい」とお命じになりました。人には決して伸ばすことができなかった枯れた手です。しかし、無から

有を生じさせる神のひとり子、病人をいやし、悪霊から解放し、死人を死から引き上げるお方が、この人の枯れた手を伸ばして下さいました。

これまで歩いて来た方向から方向転換をして歩み始めることを《悔い改め》と呼びます。自分の人生の主人が自分だと思い違いをしてきた者が、方向転換をして神を主人として生き始めるのです。

この日、主のもとに集まった人々を、主は「皆いやし」して下さいました。ここで「いやし」と訳されている言葉は、「仕える、奉仕する」という意味を持っている言葉です。主イエスは、教師や預言者であるよりも、むしろいつも「いやし手」であられました。人の悲しみを目の当たりにして、憐れんで慰め、いやされました。それは、私たちが悔い改めて、主のもとに帰るためでした。

最後の晩餐の席で、弟子たちの足をお洗いになったように、主イエスは奴隷のように仕えて下さいました。私たちが罪と死から解放し、本当のいやしと安息を与えるために十字架に架かり、ご自身の命を与え尽くして下さいました。私たちの枯れ果てた手が伸ばされて、神に向けてまっすぐに伸ばされ、神がお与え下さる命の恵みをしっかりと受け取ることができるようになるためです。

主イエスは、終わりの日、勝利の日が来ることを約束されました。かならず主はもう一度来て下さいます。その日、完全な安息が完成します。私たちが悲しませ、滅ぼすものが無くなる日が来るのです。滅びの穴から引き上げられる、という時の《引き上げる》という言葉は、《復活》という言葉と結びついています。主イエスを死から引き上げた神が、私たちをも死から引き上げ、天の御国にまで引き上げて下さいます。私たちはただ神の憐れみによって引き上げられ、神の安息を得て、神を誉め讃えて生きるのです。

今日も私たちは、主の食卓を囲みながら、終わりの日の勝利の食卓を望み見えています。ここに備えられた具体的な糧は、本当の安息がもう既に与えられていることの確かな徴です。なおしばらくの間、神に手を伸ばしながら、確かな神の助けと導きとを受けとめながら、勝利の時を待ち望みましょう。